

公益財団法人 大川情報通信基金

団体情報

代表者 （代表理事・理事長） 奥島 孝康

住 所 〒102-0093 東京都千代田区平河町一丁目 8-2 山京半蔵門パレス 301

WEB サイト URL <http://www.okawa-foundation.or.jp/>

高度情報社会の発展に向けて

大 川情報通信基金の誕生

1986 年 8 月 22 日、財団法人大川情報通信基金（以下 大川財団）は、郵政省（当時）より設立許可を受けた。創設者で初代理事長は、コンピューターサービス株式会社社長 故 大川 功氏である。



創業者 大川 功氏

情報通信分野の将来的有望な研究に助成を行い、高度情報社会の発展に寄与することが、財団の掲げる目標の一つであった。

大川氏は高度情報社会の「三種の神器」と位置付けた、人工知能（AI）・ネットワーク・データベースに関連する新会社や研究機関などを相次いで設立、積極的な先行

投資を行い、日本におけるベンチャーの草分け的存在の一人と呼ばれるようになった。根っからの起業家である大川氏だったが、社会還元の大切さも改めて強く実感していた。

・研究助成を開始

1987 年、大川財団の研究助成事業として第 1 回贈呈式が東京にて開催された。

研究助成の対象は、平山 博委員長（早稲田大学教授）をはじめ、理工学系の研究者を中心とした 7 人の審査委員によって選定された。

助成の対象となった研究は、当時萌芽的であったものが、その後の研究の進展とともに、大きく裾野を拡げてきたものも少なくない。

例えば、今日、インターネットは研究対象としてのみならず、その技術は社会にも広く普及、実用化してきている。しかしながら、助成を開始した 30 年前は、インターネットの根幹を成す通信規約（TCP/IP）は確立して間もなく、一般にはほとんど知られてはいなかった。現在「日本のインターネットの父」とも称されている村井 純氏（慶應義塾大学 環境情報学部長・教授）は「私は 1989 年度に大川財団の研究助成をいただき、それによって WIDE プロジェクト

を発足した。大川財団の研究助成が最初にいただいた研究資金であり、私たちの研究活動の出発点となった」と述べている

(2011 年度大川賞受賞時のスピーチ)。
WIDE プロジェクトとは、1988 年に設立された、日本を代表するインターネット研究・運用プロジェクトであり、その後、日本におけるインターネット基盤の構築、普及に大きく貢献している。

・ 設立 5 周年を迎え、大川賞・大川出版賞を創設

1991 年度、創立 5 周年記念講演会で、文化勲章を受章した猪瀬 博氏が「情報技術と文明～情報世紀を生きる～」と題して基調講演を行った。

1992 年 11 月 24 日、財団は、大川賞・大川出版賞の顕彰事業を開始し活動の幅をさらに大きく広げた。

大川賞審査委員会の初代委員長には猪瀬博氏（学術情報センター 所長・東京大学名誉教授）が就任した。

一方、大川出版賞の初代の審査委員長は志村 正道氏（東京工業大学教授）が務めた。情報通信は理工学系の学問の中でも比較的新しい分野のため、情報通信分野の図書に照準を合わせた表彰はほとんどなく、また、企画・編集で貢献した出版社と一緒に表彰するところも大きな特徴の一つである。

・ 海外研究助成を開始

1996 年の設立 10 周年を機に、大川財団は研究助成事業を海外に拡げることとし、アメリカ西海岸のカリフォルニア州にある 5 大学を対象とした。

それぞれの大学から複数名の推薦を受け、これを財団の審査委員会が選考する。

1997 年からは、審査委員長として志村正道氏（東京理科大学教授・東京工業大学名誉教授）が就任した。その後、カーネギーメロン大学のロボット研究所で所長を務め、同大学ワイタカー記念全学教授である金出 武雄氏から「アメリカでも使い道が自由な助成金は少ないから、その長所を強調して、さらに Tenured Professor（終身在職権を持つ教授）に差し上げてはどうか」との助言があり、これを受けて、助成対象を各大学の教授や准教授クラスの研究者とし今日に至っている。

アメリカでの最初の贈呈式は、1996 年 10 月 7 日、サンフランシスコ市内のホテル、リッツカールトンで開催された。



アメリカでの研究助成贈呈式

・ IT 最先端の国での公益事業

——大川賞の国際化

海外研究助成の第一歩として、最初の対象をアメリカ西海岸の大学としたのは、カリフォルニア州にある「シリコンバレー」の存在が大きい。IT ビジネスの新興企業が多く集まり、最先端の技術やサービスを次々に世界へ発信しているエリアである。1990 年代初め、大川 功氏はシリコンバレーをたびたび訪れた。そこで、日本とは比較にならない技術や情報の圧倒的な開発と更

新のスピードを目の当たりにした大川氏は、1995年にCSKのアメリカ本社を設立するなど、ビジネスの面での新天地への進出を加速。そして、財団の公益事業においても、シリコンバレーと身近に交流し合う、先端の「知」に着目した。2006年からは、アメリカ東部ペンシルバニア州のカーネギーメロン大学も加え、合わせて6大学に研究助成を行うようになる。さらに、1996年からは、大川賞の国際化を進めた。国内に加え海外の研究者も対象とし、国際賞として範疇を拡げた。

・人文社会科学研究への対応

従来多かった理工系のテーマだけではなく、経済や教育への影響、メディアの役割といった、情報通信と人や社会との関係を探ろうとする試みが目立ってきた。1992年度から「人文・社会科学」として独立した研究分野として助成を開始した。審査委員にも、人文・社会科学系の研究者を加え、より幅広い分野の研究助成を行うための体制づくりが進められてきた。

・アジアへの研究助成を開始

設立20周年を前にした2005年、財団の会長に五十嵐三津雄氏（元郵政事務次官）、代表理事・理事長に奥島孝康氏（早稲田大学学事顧問 前総長）が就任し、新たな体制が発足した。さらに大川賞審査委員長は相磯秀夫氏（東京工科大学学長・慶應義塾大学名誉教授）、研究助成審査委員長は飽戸弘氏（東洋英和女学院大学学長・東京大学名誉教授）が務めることとなった。

そして、2006年度、海外研究助成事業の対象を中国と韓国へ新たに拡げ、中国の4大学（北京大学、清華大学、復旦大学、

上海交通大学）、韓国の3大学（ソウル大学、高麗大学、延世大学）、合わせて7大学を助成の対象とした。

・歴史を刻む大川賞

1992年度から続く大川賞も、国際的な評価が次第に高まっている。米国マサチューセッツ工科大学（MIT）のウェブサイトでは、同大学の教授が受賞した主要な国際賞の一つとして、ノーベル賞とともに大川賞が並べられている

(<http://museum.mit.edu/150/118>)。

大川賞の贈呈



さらに、国際的な学術賞や大学のランキング機関の一つである IREG Observatory によれば、電気・情報工学関連の国際賞として、

- ① ACM Turing Award
- ② IEEE Medal of Honor
- ③ 米フランクリン財団の Benjamin Franklin Medal
- ④ IEEE Edison Medal
- ⑤ 大川賞

とランク付けされており、5番目に高い評価を得ている

(<http://iregobservatory.org/en/pdf/ireg-list-academic-awards.pdf>)。

・公益財団法人として認定

2011 年 5 月 20 日、大川財団は、内閣総理大臣より公益認定を受け、6 月 1 日、「公益財団法人 大川情報通信基金」に移行した。

・30 年目の節目を迎えて

——情報通信の未来のためにこれからも

2016 年 8 月、大川財団は設立 30 周年を迎えた。情報通信の世界が劇的な進化をとげる中、財団は常に研究者たちの立場に寄り添い続けようとしてきた。海外の研究者の割合が約 2 割と、国際化の歩みも着実である。

海外研究助成については、2016 年 9 月 22 日、グランドハイアット・サンフランシスコで開催した研究助成贈呈式の席上、大川財団は「わが国と米国との相互理解及び友好親善に寄与した功績が顕著である」として、在サンフランシスコ日本国総領事の山田 淳氏から奥島理事長に表彰状が手渡された。最初の海外研究助成をアメリカ

で行ってから、ちょうど 20 年。区切りの年に、海外からの評価を受けることは、財団関係者にとっては思いがけない栄誉だった。

この贈呈式では、奥島理事長から、30 年前に今日の情報化による社会の発展を見通し、この財団を設立した大川 功氏の類まれなる先見性と実行力が述べられた。

さらに 2017 年、「電波の日・情報通信月間」記念中央式典において、情報通信分野の振興・発展に寄与したとして「情報通信月間」総務大臣表彰を受けた。

2021 年 8 月には財団設立 35 周年を迎えるが、情報通信の分野で国際的な学術、文化の交流や人材の育成を支援し、その活動を通じて人々の幸福や平和に貢献していく。その目標の実現に向けて邁進する大川財団の歩みはこの先も終わることはない。

(2021.01)